

D. 46



神前  
夕話



特47

900

神前  
一  
夕  
話



神訓一夕話

信心する人は何事にも真心にふれよ

畑 徳三郎講述

御船八百重筆記

今茲に掲げたのは吾が教祖の御神訓の一節で、一口に言へば、神信心をする人は、神前に向ひ拜禮をもちたり、御祭をしたりするばかりでは、信心の本義には副はぬものぞ、萬事につけ、一切の心意作行を悉皆眞實にせよ、必ず實意正直の心を取外すな、この御教訓である。大方世間の信者

二  
ご稱れる者の所行を觀るに、神社佛閣に詣で、家内に神座  
佛壇などを設けて、朝夕に拜禮をするとか、神饌供物を進  
献るとかすれば、それで信心であるかのやうに心得翻て  
其心情所行を觀察すれば、心は邪見の鬼となり、行は慳貪  
の奴となりて、祈る處は、我情我慾の願望を滿たさんどす  
るやうな輩が多くて、眞實信心の本義を辨識へて居る者  
が鮮いのは、實に嘆しい次第である。その風習が自然滔  
滔と社會を風靡して、迷路邪徑に徘徊ふ者が多く、淫祠妖  
教は、時を得顔に榮え、狡黠なる奸僧教師等は、これを匡正  
うごはせず、却てその弱點に付け入りて、煽動立て、益

人心を腐蝕し、愈品性を墮落さしめて、己が私利を貪るな  
ご、鼻持もならぬ有様である。かくては宗教は、パナルス  
よりも恐しき、社會の毒物で、教師は、虎狼よりも怖しき國  
家の賊物である。  
抑、吾が教祖の教へ給ふ信心といふは、然様のものと、天地  
の差位處ではない。信心とは、この宇宙間に廣大普遍と  
て、廣く大きく萬有に行渡りて、遺漏すことなき御徳を具  
備へ給ふ、絶對無比の神の御座ますことを信じ、尊び奉り  
て、恰と子が親を慕ふが如く、何事も其御徳に肖るやうに、  
其御心に従ふやうに、と心掛けて、邪見を去り、心眼を開き、

四  
慳貪を捨て、仁慈を行ひ、せめては聊でもその御恩の片端をも報い奉らうと思ふ心性自然の作用である。この心性の作用が總べての動作所作の上に活動するものであるから、萬事萬行が自然と實意正直になつて、人にも敬はれ、神様にも愛せられるやうになるので、これが吾が道の信者てふものである。此の如く人々が心の底から誠の行を樂むやうになるならば、社會は安寧に、國家は泰平に、海の内外波風立ち騒ぐこともなく、天下同胞兄弟の歡を全うすることが出来る。其處が信心の徳澤で、連も空漠たる庇理窟をならべて居る人間の味ひ知ることこの出

來ぬ妙味である。

然らば其神とは如何なる御方であるか、何處に鎮座するか

こいふに、

教祖も、

神は聲もなしかたちも見えず疑へば限りなし恐るべ

し疑を去れよ、

とも、又

神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ信賴心に隔

なく祈れ

とも仰せられてあつて、神様は人間のやうに御姿が有る

でもなければ、物を仰せられるといふでもなく、何んな色目があるでもなければ、なんの香もするといふでもない。によつて、固より人の肉眼で見る譯にもゆかず、人の智識によつて、思議し得られるものでもない。故に通常人の心には、在るかと思へば無きが如く、無きかと思へば在るが如く、疑へば疑ふ程、不可思議のものであるが、神様は今日の生賢な人の考へて居るやうに、無きものでもなく、邪見な信者が、吾身勝手に思つて居るやうなものでは、勿論なく、社の内へのみ鎮まつて御座るものでもなければ、高天原に留つて御座るわけでもない。然らば何處に御座

るのか、如何にしたら認めることが出来るかといふに、神様はこの大天地間、到らぬ隈なく、充滿らせ給うて、其の御徳を顯し座すもので、即ち仰いで、日月星辰となり、俯しては、山嶽河海となりて、此の宇宙を構成せられ、其間には、禽獸となり、蟲魚となり、草木となつて、各その性能のまゝ、に發育ち、その活動をなすつゝ、條理が秩然と整備つてあるのは、果して誰がかゝる現象を生成したのであるか。是れが皆、神の御徳の顯れた處で、決して人の力でないことはいふまでもないことである。かくいつて居る御互が、身体も、即ち神の御徳によりて、生形られたもので、己が

八  
靈魂は、直に神の分靈である。されは神様は御祀申してある處は、いふまでもなく、山のそぎ、野のそぎ、海の果でも、川の源でも、寢間の中でも、便所の下でも、御座らぬ處とはなく、自分は何時にも神様と離れやうとて離れることの出来るものでない。故に常にこの廣大普遍の神の靈徳を信じて疑はず、我情我慾の念を去つて、正見を開き、肉眼をおいて心眼を開いたならば、今が今、智者も、愚者も、富者も、貧者も、忽然と神を認識め、直ぐに神様に對面することが出来るのである。さて、前にもいうた如く、神様は不可思議の靈徳妙力によ

りて、萬物を生成し給ひて、各その性能のまゝに、發育活動をなさしめ給ふもので、かの獸類が山野を奔馳り、飛禽が空虚を翱翔り、魚介が河海に游泳ぎ、狗が夜を守り、猫が鼠を捕へ、梅は梅の實を結び、櫻は櫻の花を開き、水は低きに流れ、火は高きに騰るなど、これ皆、その性能のまゝに活動くものである。そこで、人も矢張他の萬物と同じく、神の生々化々の靈徳によりて、現世に生れ出たものなれば、享け得たる本性のまゝに、人たるものゝ道を盡すべきはいふまでもない。況や人は、他の動物に比べて完全自在なる体格を有ち、萬物に邁れたる智力を有てるものなれば、

この体格と、この智力とを、活用して、天地の道理を究め、萬有の性能を察し、學問を修め、職業を勉め、諸種の發明をなし、廢物利用の道を考へなごして、天地の育化を賛け奉り、社會國家の福利を増進めるやうにすべきものである。禽獸は、生れたまゝに、別に衣類を求め、くともなく、穴に伏し、枝に住んで、家屋を設けることもなく、嘴牙を頼みて、器具を造出すこともなく、自然に生ずるものを食つて、培養調理するなごいふこともなく、飢ゑては、兄弟噬み合ひ、長じては、親子その別を知らず、誠にあはれとも嘆かほし、いとも言様のなき次第であるが、そこは人たる者は、天然

享け得たる智能によつて、古より衣食の道を考へ、家を建て、風雨寒暑の凌ぎを致し、種々の器械を發明して、便益を圖り、遂に今日の如き、自在なる、歡樂なる、社會を構成すことが出來た。尙爾、今何れ程まで進歩するか、知れな。いは、是は偏に萬物に卓絶たる智力の働きである。さりながら、茲に一つ考ふべきことは、外ではない、この智力といふものは、かばかり結構なものではあるが、さて若し、人にして、徳性といふことが、缺けたならば、如何なるであらうか。銘々皆我情我慾の奴隷となつて、智力の多い者は、智力の少い者を欺き、体力の強い者は、体力の弱い者を倒



し、弱い者責めの強い者勝ち、それこそ、禽獸の群と、少しも區別はないであらう。否、禽獸は人間程智力がない、故に、まだしも甚しくはないが、人間は智力があるが爲に、禽獸よりも、其の慘酷も、數倍甚しいことであらう。佛者の所謂、餓鬼道、修羅道、畜生道にも勝る現象となるに相違なからう。見られよ、今日の社會の有様を、人は往古より産れながらにして、良心の善惡を分別する、徳性を有ち、至仁なる天皇陛下が統治め給へる國家に住み、嚴正なる法律保護の下に生息しながら、尙一時巧に法網を免れて、無辜の良民を苦しめ、終には、己れも苦界に沈淪むやうな悪徒

さへあるではないか。これ等の徒は、無智者では出来ぬ、寧、相當の學問を習ひ、十人並以上の智力のある者である。かく思へば、人間の智力は至極結構なものではあるが、徳性のこれに伴はない、智力は、結極自他の害となる恐しさものである。

されば人たるの本性は、徳性即ち誠の心で、この誠の心があつてこそ、智力もいよく、其光を放つて、國家社會を利益するものであるから、人たるものは、萬事萬行真心にならねばならぬ、正直實意の心を取外してはならぬ。これが人たるの常道にして、神の御心に從ひ、神の御徳に肖る

といふもので、信者たるもの、最大切なる務めである。  
 かく、人たるの常道を踐み行ふことが、信者たるもの、緊  
 要なる務である、と言つたならば、然らば人の常道さへ踐  
 むものならば、皆信者といふことが出来るか、といふにそ  
 れは、如何にも神の御心に適ふ人、といふことは出来るが  
 吾が今日いふ處の信者とは言へない。若し常道を踐ま  
 ない人ならば、所謂人面獸心、ごでもいふべく、人体の怪物  
 ごでも、いふべきであらうが、たとひ宇宙間に嚴然たる天  
 神のましますことを知らぬにしても、人たるの常道を踐  
 むは、人の通義であつて、これ文では未だ信者とはいはれ

ぬ。吾が今信者といふは、尙一步抽んでたる、高德を修す  
 る者をいふのである。

さらば、その高德を修す、ごは何ぞといふに、人の行ふべき  
 常道の根元、天地常經の本源たる、天地金の大神の威徳の  
 嚴然實在なることを知つて、その御威徳を敬ひ尊び奉り、  
 信じて疑はず、大神の御心を心として、日夜勉めて怠らず、  
 報本謝恩の勤行をするものをいふのである。

こゝで一つ注意して置きたいのは、信心といふことにつ  
 いて、身で修することゝ、心で修することゝの二つがある。  
 身で修することは、懈怠なく神事に奉仕し、朝夕に拜禮する

此か、教會に參拜するこか、又は家職に勉勵し、慈善の行を  
 なすこか、總て言行實正なるここで、心に修するこは、苟も  
 我情我慾を切斷ちて、邪見を懷かず、虚妄を思はず、教祖の  
 教を心として、常に守を心に掛けて居るここである。こ  
 の二種の修行をなすが、即ち信者たる者の本務である。  
 今假りに、この二種の修行に、名目を附けたならば、一は身  
 の信心といひ、一は心の信心とでもいふであらう。此の  
 二種の信心は、何れが正、何れが邪といふ譯ではないが、其  
 本末を言へば、心の信心が本で、身の信心は末である。本  
 末が揃つて互に相助成するので、神慮に副ふ信者となる

のである。又一つ積極的の信心と、消極的の信心との別  
 がある。その消極的の信心とは、身心共に教祖の御教に  
 よりて修行して、自分一己の徳を得んことを勉めるもの  
 で、積極的の信心とは、自分が享け得たる信心の徳を、廣く  
 社會の大衆に敷及して、自分が自分の身を愛するが如く、  
 他人の身を愛して、之れを救濟うと務めるのである。故  
 に消極的の信心は、初級の信心は、高級であ  
 る。功力の點からいふたならば、無論積極的の信心が偉  
 大のである。

人の身が大事か吾身が大事か人も吾身も皆人

天が下に他人といふ事は無きものぞ

と教へられてある。希くは信者たる者は、自己が心身の

修行を、晝夜緩まず怠らず、勉め勉めて、廣く一般の人衆に

も、その徳澤を及すやうに致し度ものである。

さて、前から段々申した如く、人は享け得た本性のまゝに、

務め行くのが人たるの常道で、人たるの常道を踐み行へ

ば、信者にあらずとも、神意に適ふものもあらうが、又名ば

かりは、信者といはれて、單に形式的の修行を行へばとて、

心から道を希ひ、行を正しくするといふ者でなければ、そ

れは、畢竟、神前に誥をして居るのも同じに、神意に適

ふことは出来ぬ。神様は正直であつて、己に阿諛をして

くるやうな心汚き者を愛し給ふものではない。此處は

一番、信者たる者は、よく、猛省ねばならぬ。

されば、常道を踐み行へる人と、眞の信者とは、如何なる利

益の差が有るかといふに、これは一段と六つかしいやう

だが、實に妙味のある處である。神様は、既に人々には、人

たるの權利を興へられてあるものであるから、人たるの

常道の上に於て、活動することは、各人ともに自由自在で

はあるが、奈何せん、天地間には、天災地妖など、いろて種々

不測の災變がある。彼の三陸地方の海嘯だの、美濃尾張地方の大地震だのといふとは、何人も知る處である。又近くは、佛領なる西印度のマルチニクとかいへる島で、火山が破裂して、其處の全街悉く打壞され、人口三萬餘も死んだといふではないか、堅牢なる軍艦なきが、風波の爲に破損をなし、遂には沈没するなきいふことも、珍しくはない。到底限りある人の力を以て、限りなき自然の勢力に、打ち勝つことは出来ない。又一己人が身にも家にも、或は祖先の業因により、或は過去の罪障なきによつて、吾人を苦しめる事も、尠くない。何日何時、如何なる思の外

の凶事に遭遇すかも知れぬ。かく思へば、實に寒心するやうであるが、其處が即ち信心の功力、信者の利益で、常々より何事にも真心になりて、偏に神様の靈徳を尊奉り、不可思議の妙力を信賴んで、善惡とも打ち任す心になつて居るならば、自づと彼の御救濟を蒙つて、安く樂しく生息すことが出来るのである。神の靈驗を蒙るといふとは、到底人の智力なきを以て考へ識られるものではない。神の靈驗は、その靈驗を受け得た者に於て始めて知ることが出来る。今一つ終に臨んで、神様の靈驗を受けたる人の實談を御話して、兎に角局を結ばうと思ふ。

それは、去る明治廿五年舊曆八月四日のことであつたが、九州福岡市東港町に、金光教福岡教會所(其頃は神道金光教會福岡支所といつた)へ一人の老嫗が、小兒を脊負て參詣つて來て、教會長なる吉木榮藏氏に對つて申すには、先生、私は今日初めて參詣致したもので、實は此の女兒は、足が立ちませぬので、何卒神様の靈驗で助けて頂きたい、と思つて參りました。が、助かるで御座りませうかと言つた。そこで、吉木教會長が、それは氣の毒なところである、神の靈驗を蒙ると蒙らざるは、皆祈願ふ人の心一つなのである、が何故しつかり治療をして上げなさらぬ。ハイそれ

疎は御座りませぬ、既に人の力の及ぶ限り爲盡しまして、今は詮術もない處から願ひに參りました。然様か、然らば貴婦は何所の何といふ方でありませうか。ハイ姓名はちご申上乗ねますが、私は當市鍛冶町に住む者で、此の兒は當年五才になります、何卒これ丈で御祈念を願ひたう御座ります、といふから、教會長は、それではいけぬ、苟も神の靈驗を蒙りたいといふ者が、姓名が明されないやうな薄志では、御祈念することは御斷りすること、いはれたから、詮方なく、夫れでは申す、私には鍛冶町なる原田壽道と申す者の母で、此の兒は私の孫で清と申す。先刻も

充分治療をせよとの御言葉でありましたが、拙いながら私の良人も醫師で、これの親、壽道も醫者でありまして、目下は當地の病院に勤めて居ります。斯様を譯でありませうから、固より醫術の及ぶ限りは、手を盡しましたので御座ります。……。ハア分りましたが、しかし、其兒は生來足が立たぬのか、又は中途からか。ハイ二歳の時に、子守が濱邊の材木の上に遊ばして居りましたが、過つて落しましてから、遂に子守の御蔭で、斯様な不具者となりました。子守が粗忽から不具者になつた、と聞けば、實に御氣の毒のやりに思はれるが、數年経つた今日に至るまでも、人を

恨み憎みするやうな心根では、逆も神様の御心に適はぬから。……意味ありけな一言に、圖星を指されて、老嫗は先生恐れ入りました、今は何を隠しませう、實の所此の兒は俗にいふ骨なし兒で……不具者を産みましたといふては、世間の手前もご思ひまして……と泣き伏しました。そこで教會長は、ハアよるしく、それで悉皆分りました、自今は教祖の御教に従ひ、一心に御信心なさらねばならぬ、言は、其の兒の爲には、これから新規に脚を造つて貰ふのも、同じ事であるから、今日や明日のさうした處で、さうは容易くゆくまい、何んでも普通の体格になるまで、如

何なことがあらうとも緩まず怠らず、信念を凝らさねば、  
 寧信心せぬ前が優な位である。兎に角、今日から百日を  
 期して靈驗を蒙る心にれなりなさい。こそれより種々  
 神理の不可思議なる、神徳の廣大なることなご説き聞か  
 されたが、老媪は子よりも可愛といふ孫の、不具を助けて  
 頂かうといふのを、一生懸命、兩親たちも、さすが醫師丈に、  
 到底人力の及ぶ處でないことを、確知つて居るから、神の  
 靈驗にて助かるものならご共々、一心に御信仰をして  
 居たが、月日は早いもので、待ちに待ちたる百日目となつ  
 た。老媪は今日こそはご未明より起きて、家内の神前に

祈念を凝し、それより、教會所へ參拜の準備に、小兒清が顔  
 を洗ひ、衣服を改めさせなごして、中の室の障子の側に座  
 らせ置き、自分は帯を締め直して居たが、清がけた、まじ  
 い笑聲を出したものであるから、ふご願れば、アア不思議  
 今まで腰より下には骨なしと思ひ居りし孫が、障子に縋  
 りて立ちながら、さも嬉しげに笑つて居るので、老媪は嬉  
 しさ、ありがたさ、狂氣のごとく、スハ御蔭を頂いた、清の脚  
 が立つた、ご叫ぶものから、家内の者等も馳せ付け、此の現  
 状を見て、喜びの餘り、何の言葉もなく、只々感喜の涙に咽  
 んだ。あはれ、この一時、親等の心中は、如何であつたらう、



恐らく筆にも言にも述べ盡せまい。さて老母は、壽道夫婦の者等と、清を連れて喜び勇んで、教會所へ参詣し、涙ながら厚く御禮を申上げた。そこで教會長は、今後益々信心の忽にすべからざることを、諄々説き示された。處が、老母がいふには、此の兒は足が立つたばかりでは、未だ普通人にはなれませぬ、此の兒は、生來物を言ふことも出来ぬので、御座りませぬ、何卒此上の御利益にて、口の利けるやうに成りますやう……願ひ出された。教會長は聞き取つて、其足ですら、靈驗を頂いて立つたのじやないか、さすれば、口も御蔭の蒙れぬことは、ない筈、先般も、十人並になる

までは、ごいふたのは、此處のことじや、亦今日から百日間、辛抱する氣で、尙一層信心をなささい、と言はれた。一同は、既に神徳の不可思議、靈驗の顯著きを、覺知つて居るから、一點の疑念もない、愈丹精を凝して、祈り行く中、兩脚は、益立派に歩めるやうになつて、今は全然一人前となつたが、口は未だ利けぬ。其の内早や百日目となつた。前回にも、満願日に御蔭を受けたことゝ、今度も何卒して御蔭を……と思ひ込んで、嫁と共に、清を連れて参拜して、先生、今日が、また百日目で御座ります、何卒前回の如く、靈驗の蒙れますやうに願うた。教會長は、神前に祈念し、

即て、供へてあつた菓子を、一つ手にして、退つて来て、清に見せて、ソラ今日は御蔭を頂くのじや、オカシ」といへこれ  
を戴かす、オカシ」といへ、ご再三教へる母も老媪も共に「オカシ」云へ、と口を添へて勸めて居たが、やゝあつて、清は怪しげに「ホカセー」と云うた。ソラ「ホカセー」といへたご、一同は大喜び、只管神徳の難有いことに、感泣拜謝して、我家に歸つて、家族一同打ち集ひ、ありし次第を語つては、又も涙の雨。如何にも然様であつたらう。かくて、吾家の神前に、奉養の祈念をして供へてある、煎餅を撒下て、「センペイ」といへ、これを與りますと、繰り返し、言ひ含める内

に、清は「センペイ」というた。それより、日増に口も利けるやうになつて、八歳の時から小学校に通ひ、九歳からは、琴を習うて、今は立派な娘となつて居る。如何じや、皆さん、不思議と言はゞ不思議、難有いと言はゞ難有い、何んとも言ひ様のない次第ではないか。  
人は人たる常道を踐行つて、自由の活動をなすつゝ、受得られる御蔭は、誰も平等に受け得られるものであるが、かゝる奇瑞の靈驗は、眞の信者たる者でなくては、窺ひ知ることには出来ぬものである。

教祖の神は

神信心して靈驗のあるを不思議とはいふまじきもの  
 を  
 教へられてある。神様は前にもいふた通り、不可思議  
 の靈徳、不測の妙力を具備へ給ふものである。既に神は、  
 不可思議なるものであると知らば、これを信じて疑ふこ  
 となく、誠意以て祈るならば、その不可思議の靈驗を蒙る  
 といふことは敢て不思議な、といふわけなものである  
 まい。某人が二代金光様に、私等が御蔭を頂いた話を、世  
 人に致しますと、それは時節といふものじや、とて信じま  
 せぬ、と申上げた。すると、二代様が、サウシヤ信心をせぬ

ものは、さういふ結構な時節は知らぬわい。と仰せられ  
 た。皆よく肉眼を塞いで、一つこの妙味を味うて見なさ  
 い。

しかし本教は、世の賣僧や、妖怪なる教師らが、幾日の間祈  
 禱をしてやるから、祈禱料を持つて來いの、これは安産の  
 神符じやの、災難除の守護札じや、など、賣藥屋の功能書  
 と同じやうなことをいふのではない、祈つて靈驗のある  
 もなきも、吾心で結局宇宙間にまします、絶対無邊の神様  
 の恩徳を信じ頼み奉りて、明けても暮ても、生ても死ても、  
 離れるに離れることの出來ぬことを覺知りて、何事も、そ

の御徳に肖るやうに心掛け、その御心に従ひ奉らんと、  
萬事萬行、誠の心を取外さぬやうにと、身にも心にも修す  
るのが、本教の信心である。信者たる者は、ゆめく己が  
小智に眩惑さるゝことなく、迷信邪路に踐み入ることな  
きやうに、用心せねばならぬことである。

明治三十五年五月十九日印刷  
全 年五月廿三日發行

非賣品

著者兼發行者

畑 德三郎

東京市神田區和泉町一番地

印刷者

池田 宗平

東京市淺草區黒舟町廿八番地

發行所

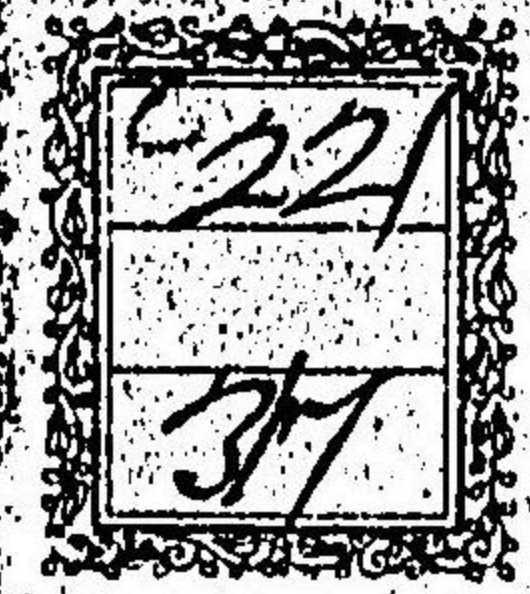
金光教東京教會所

東京市神田區和泉町壹番地

印刷所

東京並木活版所

東京市淺草區黒舟町廿八番地



三十四

の御徳に肖るやうにご心掛け、その御心に従ひ奉らんと、  
 萬事萬行、誠の心を取外さぬやうにと、身にも心にも修す  
 るのが、本教の信心である。信者たる者は、ゆめく己が  
 小智に眩惑さるゝことなく、迷信邪路に踐み入ることな  
 きやうに、用心せねばならぬことである。

明治三十五年五月十九日印刷  
 全 年五月廿三日發行

\*\*\*  
 非賣品  
 \*\*\*

著者兼發行者 畑 德三郎

東京市神田區和泉町一番地

印刷者 池田 宗平

東京市淺草區黒舟町廿八番地

發行所 金光教東京教會所

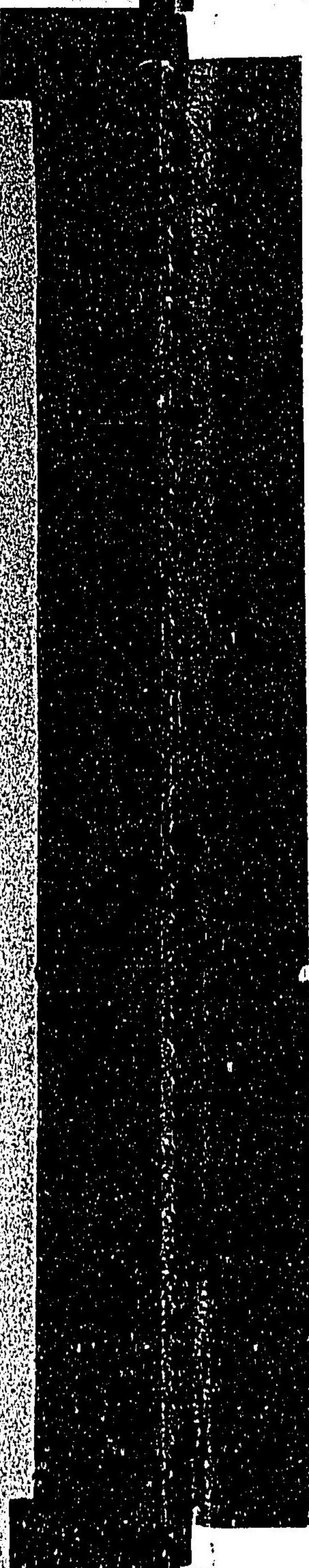
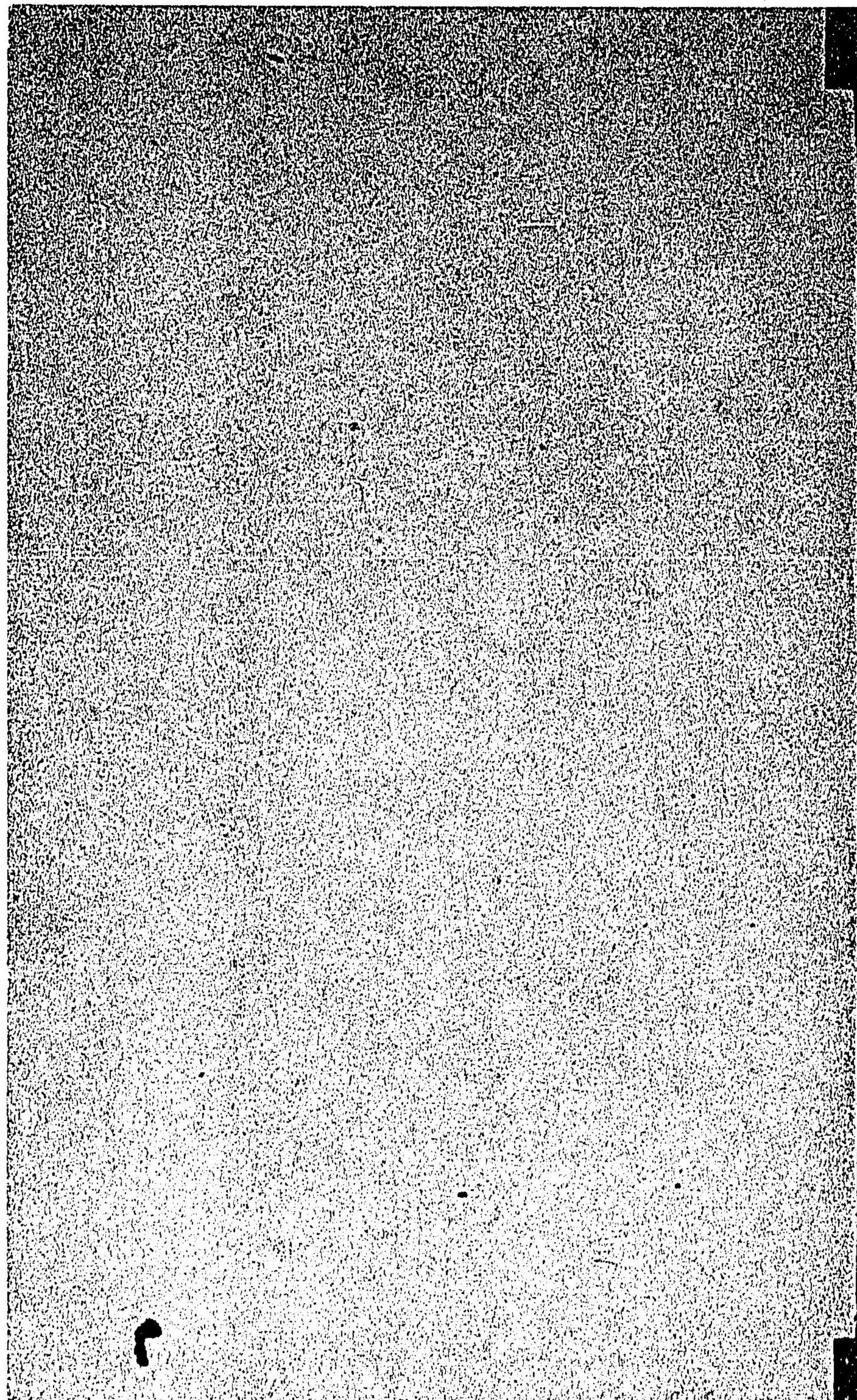
東京市神田區和泉町壹番地

印刷所 東京並木活版所

東京市淺草區黒舟町廿八番地



D46



7  
0



神訓一夕話

畑徳三郎

国立国会図書館

014181-000-2

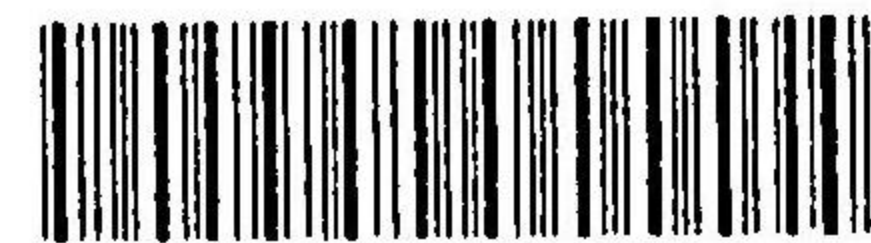
特47-900

神訓一夕話

畑 徳三郎/述

M35

ABB-0497



特

9

